風の剥製・貳

根岸一之

わが畏友古山正雄氏にこの句集を献ず

寺山修司はどこかで、俳句は滅びゆく文藝であるという意味のことを書いている。その文章は、なぜ寺山が一時的にではあるものの、俳句に熱中したかの弁明のような文章であった。しかし、それはともかく、その寺山一流の「滅びの美学」に魅せられて、すでにほぼ三十年が経過した。そして、俳句に深く関わるにしたがって、日本語という言語の戦慄すべき「魔術的」性能に気づかされたりもした。

ここら辺りで、数冊の私家版の句集に纏めておこうと思いついたのは、ごく最近のことである。現実世界に眼を移せば、当たり前に出版できたとしても、そのような「滅びゆく文藝」には、多数の読者を獲得出来る術もない。とすれば、何時か誰かが発掘するまでの数百年を、電脳の海に沈めておくべしと決意し、ここにそれを行うことにする。

喇叭の残響

序：影を編む

著者の視線は、常に「裏と表」を同時に射抜くことができる。「祝」なる漢字に「呪」を見出し、満月の輝きのなかに暗殺者の影を認める。そこにあるのは、単なる抒情ではないと思われる。マリア・カラスの喉の皺や、テレビのなかの死者の顔、あるいは一光年の彼方にある月といった、極私的な記憶と巨大な虚無とを、十七音という最短の器のなかで等価に衝突させる冷徹な意志であろうとするのである。

「言葉とは煌く刃」であるかと著者は問う。その刃で切り裂く現実の裂目からは、平城の廃墟の弾痕や、ジャコメッティのいる径、そして「の」の字に似た桜貝が零れ落ちる。それらはすべて、かつて存在し、今はただ「引用」されるのを待っているだけの、美しき化石たちである。

目次

銀漢の裏表 ——07
非在の化石 ——17
如月以後 ——27
そして殘照 ——37
影法師の影 ——47
あるひは猫 ——57
未遂の喇叭 ——67
わが彼岸にて ——77

銀漢の裏表

祝の字を呪と視たり秋燈（あきともし）

満月や骨牌（トランプ）にある裏表

丁半の盆の白きに男郎花（をとこへし）

眞の影暗殺者めく十三夜

澄みわたるもののひとつに寝待月

銀漢や斃れしものの名は中也

言葉とは煌く刃　憂國忌

暗黒の青の側より月蝕忌

天高く何処（どこ）より墜（ふ）りし大伽藍

非在の化石

梅雨明やマリア・カラスの喉の皺

潮の香を欲（ほ）る風のなか八月（はづき）來ぬ

梅雨冷の闇より湧ける汽笛かな

百日紅死はそれぞれの色にあり

黙祷の蝶よ化石となりにけり

敬老の日に留守電の聲の無し

極月の女陰（ほと）ある人形焚きにけり

百八の悔ひに響けり除夜の鐘

初夢や空をシャネルのオートバイ

如月以後

神さぶる鴉の森や紀元節

二月十四日黒く滲める文字の蹟

平假名の「の」の字に似たり櫻貝

梟の眼（まなこ）に問へば夜しんしんしん

初戀の失せてまみどり蓬餅

花屑の底より狂ふ円舞曲（ワルツ）かな

夕景やガレの花瓶に秋すでに

北歸する隊商一列月天心

菊枕日差し重たき午後なりき

そして殘照

ゆふされば はや葉桜の 散りいそぎ

螢の忌闇のなかなる闇を視る

蒼穹の底ひるがへしつばくらめ

古きジャズ聴くや崩るるかき氷

夏館（なつやかた）背後に冥（くら）き迷路あり

寫眞にはうつらぬ闇の宵祭

帝都羅馬かくして滅ぶ九月盡

秋日傘老嬢の爪あかきかな

末黒野（すぐろの）や此処は地獄の一丁目

影法師の影

蒲公英や夢みる頃は過ぎた筈

廃市の蝶一瞬にして紙となる

節分の鬼は肌色さりながら

紀元節見知らぬ神と睦みけり

かへり花散り曝(さらば)へる慙愧かな

菊人形陰謀宿す眼のひかり

愛されぬものを刺しけり冬の蜂

狂ひ花狂ふ場のなく獨り咲く

影法師ワキとしてのみ生きて　冬

あるいは猫

秋風やハモニカの尾の曳くごとく

老女より零れて白き息となる

路地裏の默（しじま）に深く師走かな

極月やテレビに並ぶ死者の顔

虚無を啼き鴉群れとぶ憂國忌

失語せる鸚鵡と向かふ夜の雪

霜の夜や悪夢引用して睡（ねむ）る

沙羅雙樹　象牙　砂濱　影法師

七種（ななくさ）や通常業務にもどる猫

未遂の喇叭

春ゆふべ鍼力の喇叭のたりかな

薄墨の草書降らしつ春の雨

桃色の闇を綴ぢたる雛（ひひな）かな

七月や平城（なら）の廃墟に弾丸（たま）の穴

踏む影の逃げ惑ふかな炎天下

花野ゆき歸るすべなき遠さかな

寝待月満つることなき一頁

老残といふ一語にて小町の忌

未遂にて了はる人生（さだめ）や除夜の鐘

わが彼岸にて

わたしの忌わたしの數の水中花

星今宵帯の解かれず結ばれず

夏祭なみだの訳を問はざりき

濱日傘水平線と壜に詰め

わが街を廃墟と思ふ夏日かな

ソオダ水架空の都市の青寫眞

海邊より來たり海へと還る夏

形而上學の零るや沙羅の花

秋彼岸部屋に白紙の置手紙